



長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療か在宅医療まで「人を診る総合診療を目指す。」の連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

新型コロナウイルスの感染拡大から地域医療を守る一町医者として、目が回るような日々が続いています。

私が原作と医療監修を手掛けた映画『痛くない死に方』(高橋伴明監督)も、今年8月の公開予定でしたが、来年に延期となってしまいました。忸怩(じくじ)たる思いですが、コロナ感染に怯える患者さんからの相談電話が、昼夜鳴り続けている今、映画延期の知らせをしている場合ではないと歯を食いしばっています。

しかし、製作に携わってくれた映画関係者は、いつ再開できるかわからぬ仕事を前に、皆さん青息吐息です。倒産危機に追い込まれているミニシアターもいくつもあり、心配が尽きません。そこに、邦画界を牽引して

151 映画監督 大林宣彦



大林さんは、2016年の夏、映画『花筐/HANAGATA M』の撮影中に、肺がんの

ステージ4、余命半年との宣告を受けました。しかし、大林さんは予定通りメガホンを取りました。過酷な撮影の中、再検査をすると、「余命半年」が「余命3カ月」になっていたといま

映画完成までは、まだまだ時間が必要……ここで大林監督は、東京に戻って医師と相談をし、分子標的薬「イレッサ」を選択しました。これが奏効し、無事に映画を完成させたので

イレッサは、肺がん患者さんの誰にでも有効なわけではなく、がん細胞にEGFRという

遺伝子変異がある人のみ投与される分子標的薬です。大林さんには、この遺伝子変異があったのでしよう。

私の診ている患者さんでも、イレッサで劇的に回復された人が何人かおられます。しか

し、薬剤耐性まで平均1年と言われ、早晚再発して「やめどき」が訪れます。大林さんが余命3カ月と言われながら4年近くも生きられたのは、治療はもろろんのこと、映画への情熱と気力に支えられていたことは間違いありません。余命宣告など気にしないで、というか忘れて、好きなことを続けた人のほうが長生きしているように思います。

先の作品の完成後、さらに大林さんは、『海辺の映画館 キネマの玉手箱』という作品を、尾道で撮ることを決めました。「戦争と命」というテーマに、自らの命を削るようにして挑んだそうです。

本来ならば封切りされるはずだった10日、病床で延期の知らせを知った直後に大林さんは逝きました。「監督は映画が完成し、公開するまでは死ねない」が口癖だったとか。それを叶わぬものにした新型コロナが本当に憎いです。

映画完成への気力が生命力に